



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

国際動向におけるSDGsとESD

東京大学大学院教育学研究科
准教授 北村 友人



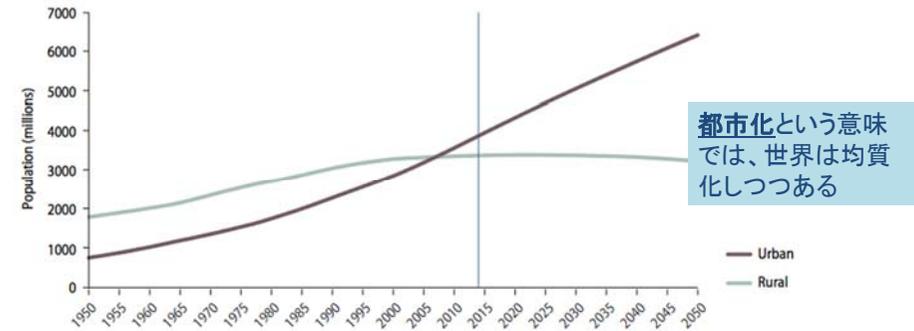
1. はじめに

—SDGsの背景にある世界観・人間観—

世界的に人類文明の都市化が進行中(グローバル・マクロ的視点)

Figure 2. Urban and rural population of the world, 1950–2050

A majority of the world's population lives in urban areas



2014年: 全世界人口の54%が都市に居住
 1950年: 30%
 2050年: 66%が都市に居住すると推定 (出典: UN <http://esa.un.org/unpd/wup/Highlights/WUP2014-Highlights.pdf>)

同時に、各国間、国内地域間、都市内地域間の富の分配・格差も拡大



例えば、電気に依存した都市生活・インフラ、高度医療、教育機関、通信機能など
 一方、技術(例: 電気の利用)が本当に人々を幸せにするかどうかは議論あり(おそらく、絶対的答えはない)。
 格差という視点は一方的な見方である可能性も。多様な価値観、ライフスタイルを尊重すること、極めて大切

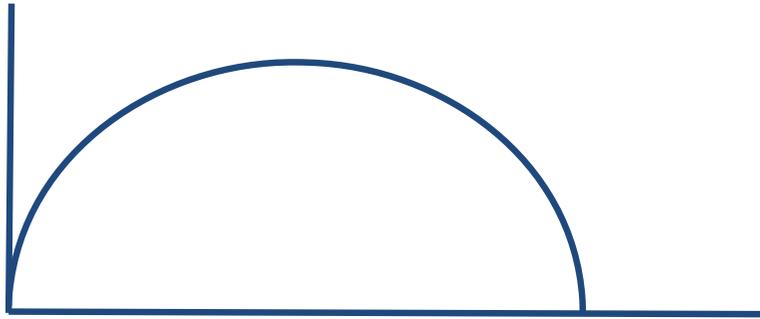


(出典: <http://www.yakei-kabegami.com/cgi-bin/kabegami/17961.html>、http://chintai.primer.ph/?page_id=43、JICA提供写真など)

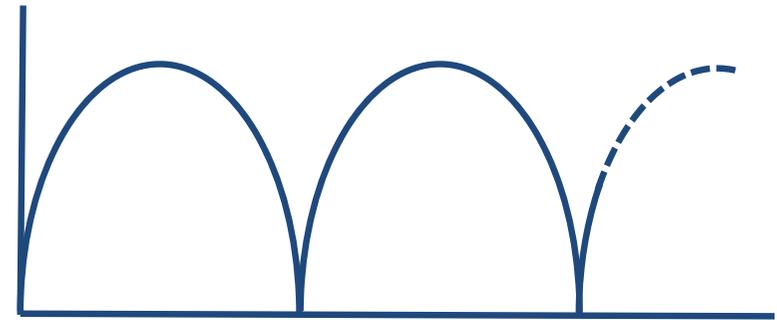
Sustainableな社会のあり方

- 限られた資源をいかに配分するか
- 誰も取り残さない (Leave no one left behind)

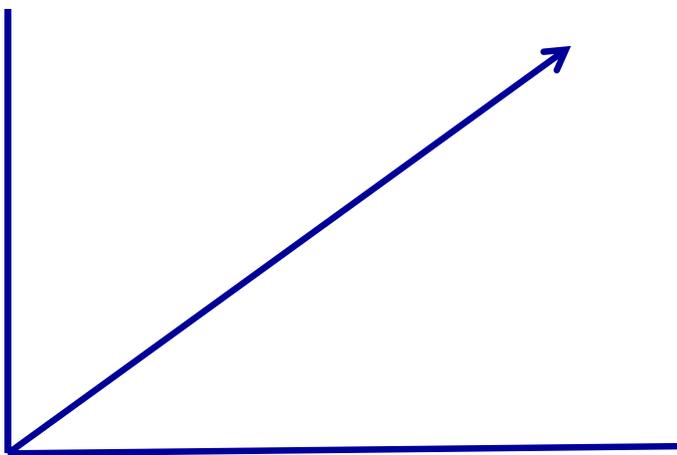
古代の世界観



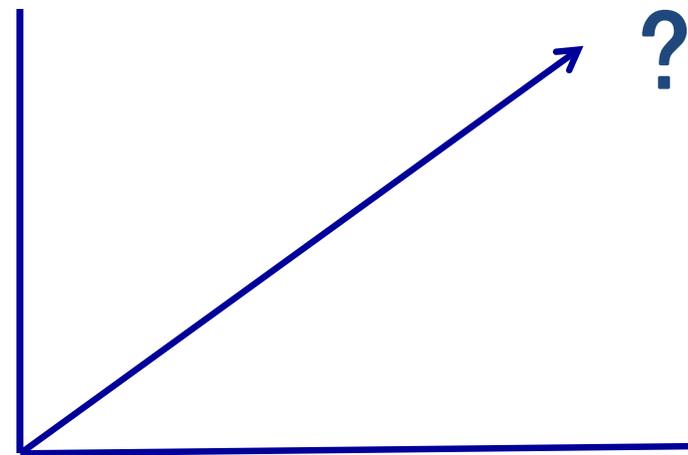
循環型モデル



近代の世界観



「近代(modernity)」への疑問



「成長」と「開発」

- 成長 (Growth):
物質の蓄積や合体によりサイズが増大すること
⇒ 量的増大・拡大
(quantitative increase and expansion)
- 開発 (Development):
可能性を拡大したり、実現すること
より良い、より大きい、より充足した状態にすること
⇒ 質的向上 (qualitative improvement)

持続可能な開発 (Sustainable Development)

将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発

世代間の公平性

現在の私たちの生活と同じくらい豊かな生活を将来の人々も営む権利がある。
経済開発が将来世代の発展の可能性を脅かしてはならないという世代的責任。

世代内での公平性

現在に生きる人々の間にも、豊かな暮らしを営む

『Our Common Future』

「環境と開発に関する世界委員会」

(委員長:ブルントラント・ノルウェー首相(当時), 1987年)

Future Design

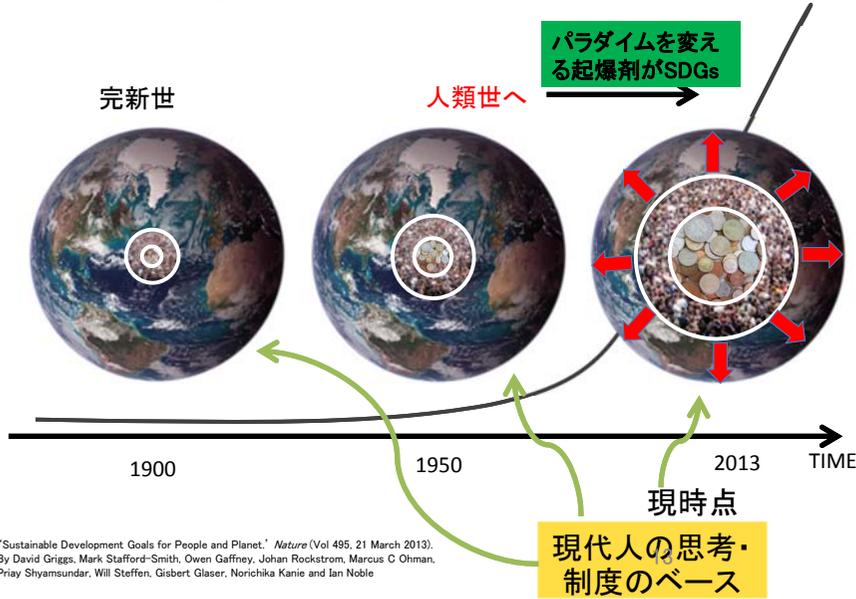
- ヒトの「**将来可能性**」の創造
 - 現在の利得が減っても、将来世代を豊かにするのであれば、そのための意思決定・行動、さらにはそうした考え方そのものが、ヒトをより幸福にするという性質。
 - 親が自分の食べ物を減らし、その分を子どもに与えることで幸せになるという感覚を、血縁関係のない将来世代まで伸ばせるのかという、根源的な問いかけ。
- Our Common Future**に対する疑問

(西條辰義編(2015)『フューチャー・デザイン』勁草書房)

「持続可能な開発目標」で目指す「持続可能性」とは?



開発と環境の課題解決への2つの悪影響
 「開発」の環境変化への悪影響 (i.e. 工業化による温暖化、森林伐採への悪影響)
 環境変化の「開発」への悪影響 (i.e. 温暖化による食物生産への悪影響)



*Sustainable Development Goals for People and Planet. Nature (Vol 495, 21 March 2013).
 By David Griggs, Mark Stafford-Smith, Owen Gaffney, Johan Rockstrom, Marcus C Ohman,
 Priya Shyamshundar, Will Steffen, Gisbert Glaser, Norichika Kanie and Ian Noble

世界が直面する多様な課題

現代社会が直面する課題群: 経済、環境、社会、ジオポリティクス、科学技術

- 今後10年間で最も影響が大きいと想定されるグローバルリスク
 - 1 長期間にわたる財政不均衡
 - 2 水供給危機
 - 3 極端な所得格差
 - 4 温室効果ガス排出量の増加
 - 5 気候変動への適応の失敗
 - 6 高齢化への対応の失敗
 - 7 エネルギー・農産物価格の急激な変動
 - 8 サイバー攻撃
 - 9 グローバルガバナンスの破綻
 - 10 長引く異常気象

持続可能な開発目標 (SDGs)



MDGsとSDGsに共通する視点



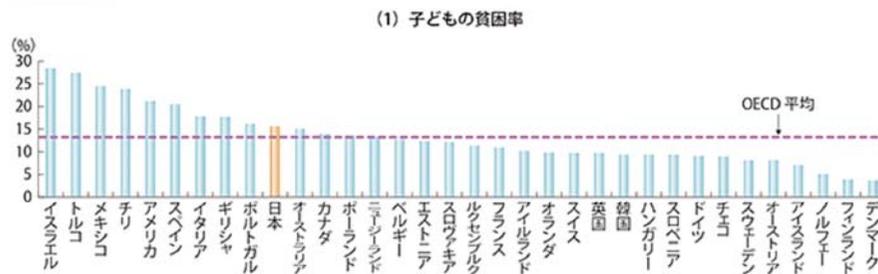
MDGsとSDGsの違い

- SDGsは、オープンなプロセスで、民主的な議論を経て決まったことであり、みんなで取り組むことが大切である。
- 「ゼロ・ドラフト」からほとんど変更なし
 - ①それだけ問題が複雑化・多様化
 - ②より領域横断的な取り組みが必要

2. いま何が問題になっているのか

相対的貧困率の国際比較

第1-3-39図 相対的貧困率の国際比較 (2010年)



(出典:内閣府HP、http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/b1_03_03.html)

日本の女性の政治・雇用・社会参画状況 — 先進国との格差は大きい —

図13 ジェンダー・ギャップ指数 (2014年)

ジェンダー・ギャップ指数 (2014)
上女性の地位

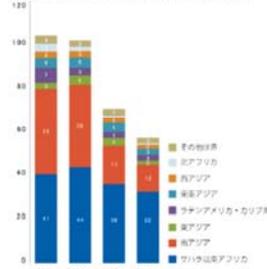
順位	国名	値
1	アイスランド	0.8504
2	フィンランド	0.8453
3	ノルウェー	0.8374
4	スウェーデン	0.8166
5	デンマーク	0.8025
6	ニカラグア	0.7994
7	ルワンダ	0.7954
8	アイスランド	0.7950
9	フィリピン	0.7914
10	ベルギー	0.7809
11	スイス	0.7798
12	ドイツ	0.7790
14	オランダ	0.7730
16	フランス	0.7588
19	カナダ	0.7464
20	韓国	0.7463
26	英国	0.7383
69	イタリア	0.6973
75	ロシア	0.6927
87	中国	0.6830
104	日本	0.6584
117	韓国	0.6403

世界経済フォーラムが発表するジェンダーギャップ指数で日本は142か国中104位。識字率や中等教育就学率、健康寿命では世界で最も男女平等が進んでいるが、管理職(112位)や国会議員(126位)で男女差が大きい。

教育関連MDGsの進捗状況と課題の検証

(1) アクセスは一定の進捗

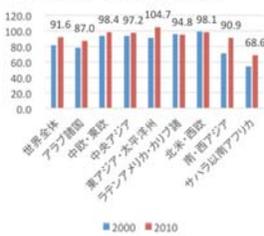
初等教育就学年齢の非就学児童数、1990年、2000年、2005年および2011年の比較（単位：100万人）



不就学児童数は2011年時点で5,700万人。（2000年時点の1億200万人から約半減）

(2) 教育の質に依然課題

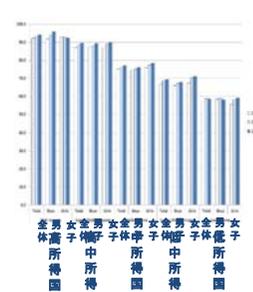
初等教育における最終学年粗進級率の推移（2000年、2010年）



最終学年粗進級率は東アジア太平洋州、南アジア等で改善したが、サハラ以南アフリカでは3分の1の児童が小学校最終学年到達前に中退。

(3) 教育の格差にも課題

男女別・国の所得レベル別の初等教育最終学年到達率（2000年、2005年、2010年）



初等教育最終学年到達率は国の所得水準が低い程低く、低所得国においては2010年時点でも6割程度にとどまっている。

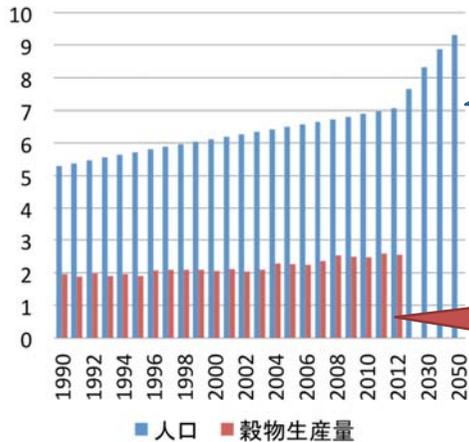
飢餓問題

- 途上国の栄養不足人口の割合は、1990-92年の24%から2011-13年には14%に減少したが、1億6200万人の子どもが今も慢性的な栄養不足に苦しんでいる



世界の人口増加と穀物生産量(トン)

(単位: 十億)



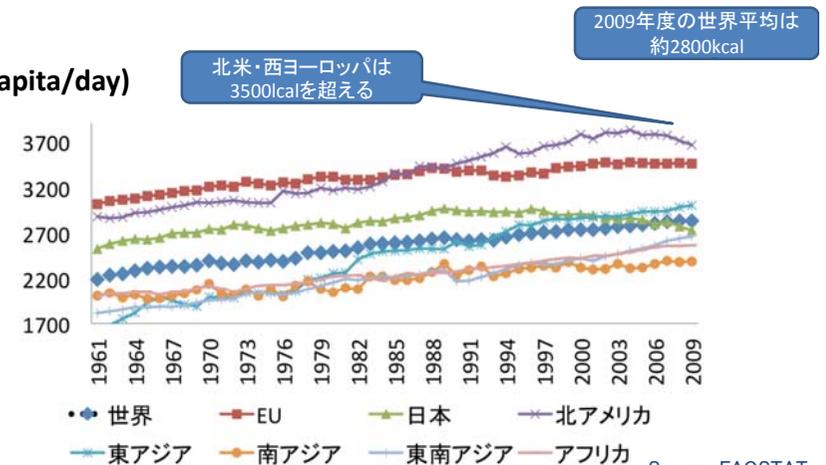
人口は1990年の約50億人から約70億人に急激に増加。2050年には、90億人に達する見込み。

穀物生産量は1990年の約20億トンから25億トンへと緩やかに増加。

Source: FAOSTAT

カロリー供給: 国際比較

(kcal/capita/day)



2009年度の世界平均は約2800kcal

北米・西ヨーロッパは3500kcalを超える

● 世界 ■ EU ▲ 日本 ◆ 北アメリカ
— 東アジア — 南アジア — 東南アジア — アフリカ

Source: FAOSTAT

肥満問題

1980年以降、肥満人口は急激に増加している。現在、世界で5人に1人は、過剰体重(=BMI>25)とされている。

肥満の流行拡大の様相は、エイズが世界的流行になった、そのスピードを上回る。



0~5歳児の肥満人口の推移(単位:100万人)

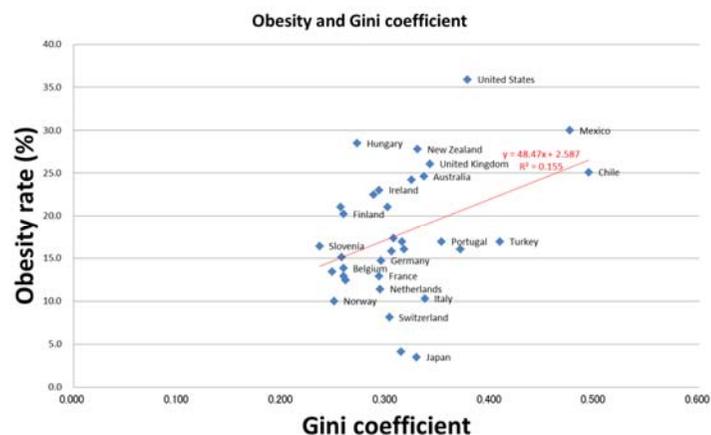
	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020
開発途上国	20.7	22.4	25.0	28.9	34.7	42.0	49.9
先進国	6.2	6.3	6.4	7.1	8.1	8.8	9.5

2.4倍

1.5倍

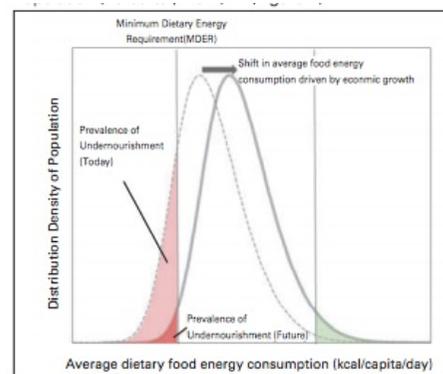
DE ONIS, M., BLOSSNER, M. & BORGHI, E. 2010. Global prevalence and trends of overweight and obesity among preschool children. *Am J Clin Nutr*, 92, 1257-64.

肥満と収入格差



OECD data 2010

健康のリテラシー(Health literacy)



飢餓と肥満という問題

- 栄養の知識 (安心して安全な食の選択)
- 健康的な生活を送るための情報
- 妊産婦、幼児、子どもの健康を維持するための知識

Double Burden(二重の負担)

例:人口問題

“人口爆発”
開発途上国

使用可能な資源の総量が大きな課題か

資源の配分の問題か

“高齢化社会+低出生率”
先進国

持続可能な社会の実現に向けた 地域に根差した学習と行動

ESDを推進する中で、**地域の文脈**(自然環境、人間活動、伝統、文化、歴史、経済、社会)をふまえて、それらの諸問題に関する**リテラシー**を高め、地域からの行動変容につなげることが重要。



3. ESD

—SDGs実現のための教育—

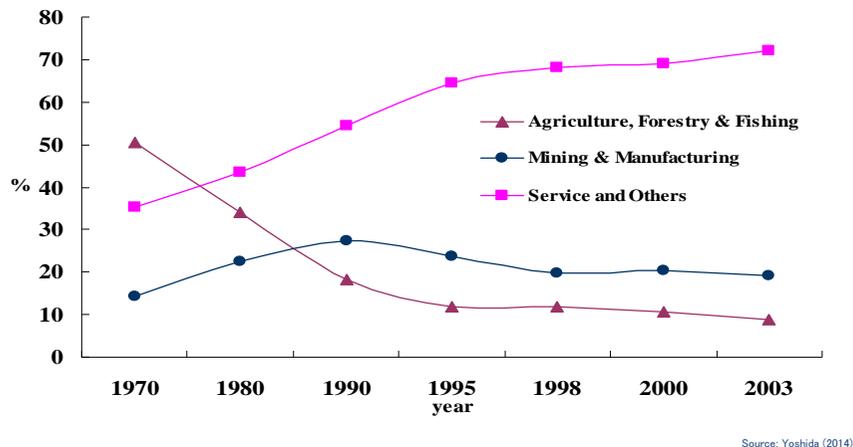
SDGs実現のための教育とは

「多様な文化を理解し、人類の未来に寄与するとともに創造的な役割を担い、世界の持続的発展に貢献できる人」の育成



いかなる**学習観**に支えられているのか、について考えてみたい

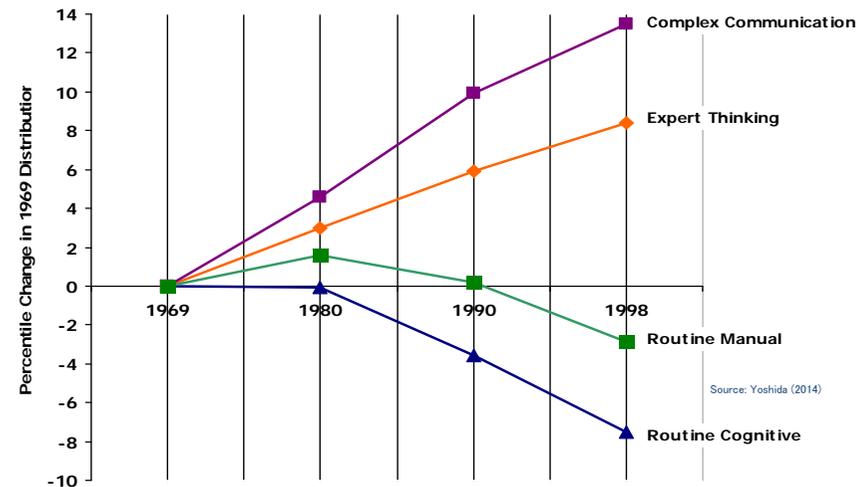
産業種別による雇用の変化(1970-2003)



Source: Yoshida (2014)

求められるスキルの変化

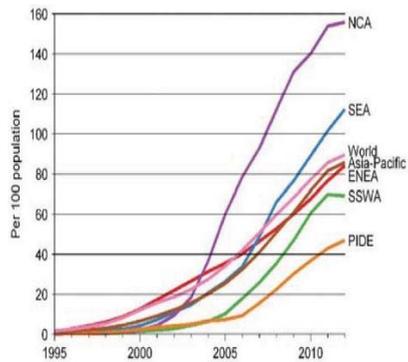
経済活動における単純労働 (routine) と非単純労働 (non-routine task) の比較 : 1969-1998 (1969=0)



Source: Yoshida (2014)

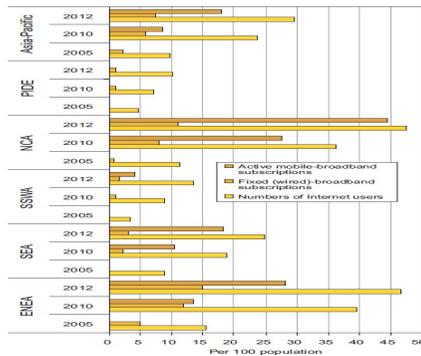
技術の革新

地域別の携帯電話契約数, 1995-2012



Source: ESCAP (2013), Statistical Yearbook for Asia and the Pacific

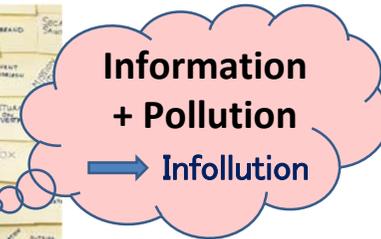
インターネット利用者数 (固定ブロードバンド及び携帯ブロードバンド契約数), 2005, 2010, 2012



* ENEA: East and North-East Asia / SSWA: South and South-West Asia / PIDE: Pacific Island dev. Econ / NCA: North and Central Asia / SEA: South-East Asia

<Presented by Dr. Gwan-Ja Kim, Director of UNESCO Bangkok at the University of Tokyo on December 10, 2015>

「情報公害」(Infollution)



インターネットを介した情報の過剰供給が、暴力的コンテンツやネットいじめ、技術中毒など子どもに相応しくない内容をさらしている状態の「デジタル公害」を引き起こしている

<Presented by Dr. Gwan-Ja Kim, Director of UNESCO Bangkok at the University of Tokyo on December 10, 2015>

柔軟な「学び」のあり方

- 体系化された「知識」や「スキル」を身につけるだけでは、すぐに古くなってしまふ
- ひとつの「正解」を求めるだけでは、世界を理解することはできない
- 「失敗」も含めて、多様な学びの機会を逃さない
- 「学び方」を学ぶ

学習観の変容

伝統的アプローチ	進歩的アプローチ
市民性に関する教育	市民性のための/市民性を通じた教育
社会秩序の再生産	変化への転換・適応
服従・追従 (conformity/compliance)	行動ならびに市民的社会参画 (action & civic engagement)
内容重視 (content-led)	過程重視 (process-led)
知識基盤型	原理基盤型 (principle-based)
講義による伝達	双方向的 (interactive) アプローチ 批判的解釈
教師主導型アプローチ	生徒主導型アプローチ
試験中心型	全人的発達
教科書主導型の学習環境	マルチメディア活用型の学習環境
教科の知識	生涯学習のためのスキル
模倣	創造
近代的な教授法	未来志向の教授法

出典：Tawil (2013) を参照のうえ筆者作成

学力観の国際的な潮流

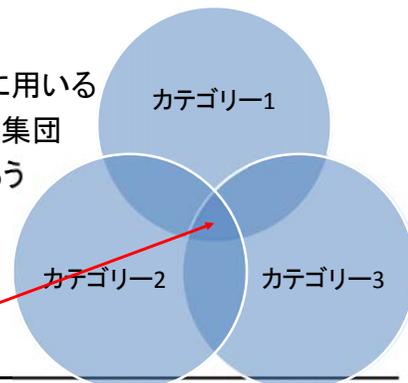
- 「コンピテンシーの定義と選択」 OECD教育インディケータ事業 (Definition and Selection of Competencies: DeSeCo)

コンピテンシー

カテゴリー1: 道具を相互作用的に用いる

カテゴリー2: 異質な人々からなる集団
で相互にかかわりあう

カテゴリー3: 自律的に行動する



反省性 (reflectivity)
(省察的な思考・行動の基盤)

「学び (Learning)」の5つの柱

- 知ることを学ぶ (Learning to know)
- 為すことを学ぶ (Learning to do)
- 共に生きることを学ぶ (Learning to live together)
- 人間として生きることを学ぶ (Learning to be)

『学習：秘められた宝』(ユネスコ・21世紀教育国際委員会報告書、1996年)

+

- 自分自身と社会を変革することを学ぶ (Learning to Transform Oneself and Society)

SDG 4.7 の重要性

2030年までに、**持続可能な開発のための教育**及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シティズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、すべての学習者が、**持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得**できるようにする。

⇒ ダイナミックに変化する今日の社会において、目標4.7が包含する課題は非常に重要である。

SDGsを実現する教育のあり方

- **学習観の共通性と多様性**
 - 「教授・学習の様式」の変容
 - 政治的・経済的・社会文化的なグローバル競争に資する人材の育成
 - 伝統文化、宗教、言語、政治体制などのローカルな文脈(=それぞれの社会にとって自立的な営みである教育)
- **学習成果 (learning outcomes) を重視**
- **民主的な社会の担い手である「市民」の育成**

ESDとは—「自立的対応力」の育成—

1. ESDは単なる知識習得ではなく、学習者みずからが価値観を見つめ直し、よりよい社会づくりに参画するための力を育むことを目指した教育です。

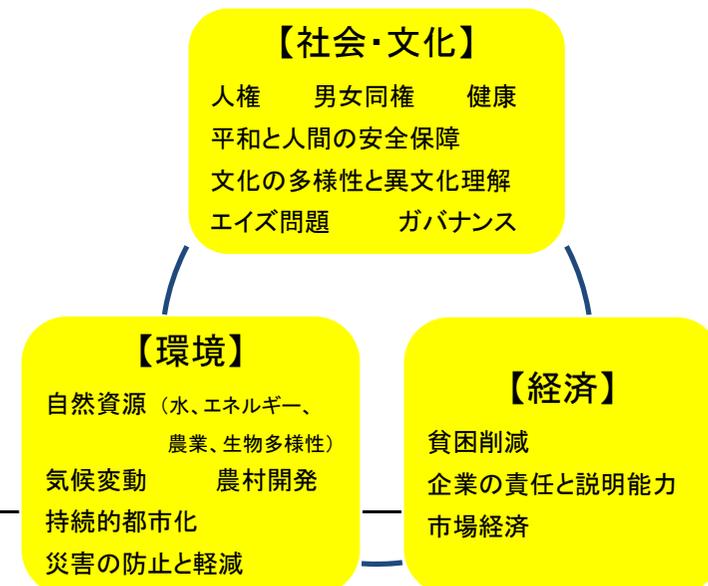


2. さまざまな持続可能な社会への課題と向き合い、問題解決型の「教育」や「地域の活動」から生まれる、参加体験型の「学び」を重視しています。

3. 学校、企業、行政、NPO、社会教育機関、農林漁業者など、さまざまな立場の人たち、大人も子どもも、それぞれがESDの担い手であり、学び手です。

4. 持続可能な社会への課題(環境・貧困・人権・平和・開発...)はとても複雑。だから、ESDは環境、社会、経済のことを総合的に扱うことが重要と考えます。

ESDの領域と戦略的テーマ



持続可能な開発のための教育(ESD)



45

ESDの基礎となるシティズンシップ教育—アジアの取り組み—

世界中で多くの国が多民族・多言語・多宗教などにもとづく**多文化国家**となっている

それぞれの国に**固有の**
社会文化的な価値観を重視
+
国を越えた
普遍的な価値のあり方についても
理解を深める
普遍的≠西洋的

46

4. 結び

結び—SDGsの視点を「学び」に活かす—

- SDGsが提示する世界観
 - Universal: 世界のどこにいても当事者である
 - 資源の配分のあり方を考える
 - 誰も取り残さない(No one left behind)
 - 「リテラシー」を高める
- ESDを通して「学び」のあり方を捉え直す

結び—ESDを推進するうえで考えたいこと—

- 変化の激しい社会（例・AIなどの科学技術の急速な進展）における「**学び**」のあり方と**学習観**の変容
- 「**普遍的**」な価値観と「**社会文化的に固有**」な価値観との間で、いかにバランスをとっていくのか
- 教育における**学習成果**をどのように**評価**するか
- ローカルな活動が、世界的な視野で見たときにもSDGsの実現に貢献していく

補論：企業にとってのSDGs

SDG Compass

Continuing Business As Usual?

- 従来のCSRとは異なるアプローチ
 - バリューチェーン全体における自社活動の社会・環境インパクトを総点検し、コア・ビジネスそのものをSDGsにアラインさせることが、戦略上の課題となる。
1. 未来のグローバル市場を創造する。
 2. グローバルな政策の流れを読み、先取りし、ルール形成に参画する。
 3. ステークホルダーの関与を強化する。
 4. 圧倒的な優位を確立する。



Source: <http://sdgcompass.org/>

Inside Out, Outside In —アプローチの転換？—

eda.c

The Gap

Bridging the Gap

Customer
Outside in

➔

Expectations
Motivations
Needs
Experience
Desired outcomes
Service quality



Organisation
Inside Out

←

Technology
Capability
Resources
Process
Offerings

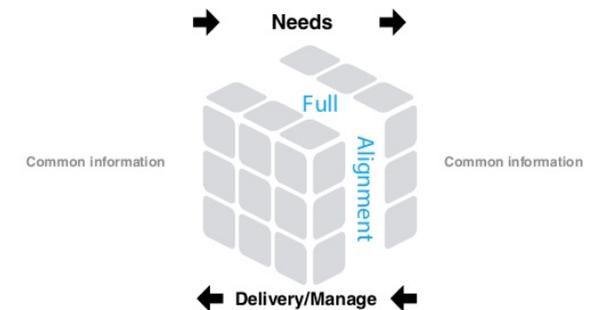
Source: Designing Experiences with Outside-In Architecture Mike Clark, Business Designer Milan Guenther, eda.c Enterprise Architecture Conference Europe June 16-18 2014 (<http://www.slideshare.net/JPMC12/designing-experiences-with-outside-in-architecture-mike-clark-milan-guenther>)

消費者（＝市民）の参画

eda.c

The customer is brought into architecture

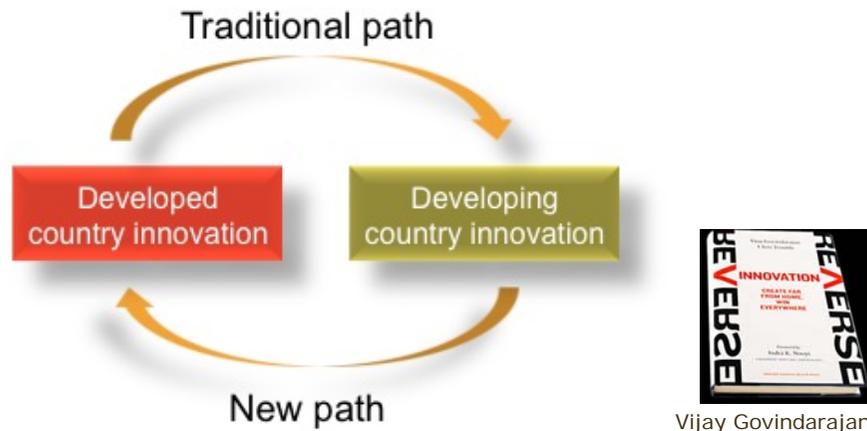
Bridging the Gap



Full outside in and inside out alignment

Source: Designing Experiences with Outside-In Architecture Mike Clark, Business Designer Milan Guenther, eda.c Enterprise Architecture Conference Europe June 16-18 2014 (<http://www.slideshare.net/JPMC12/designing-experiences-with-outside-in-architecture-mike-clark-milan-guenther>)

Reverse Innovation



Vijay Govindarajan
ダートマス大学教授

<http://ajayswamy.com/2013/08/21/reverse-innovation-and-the-role-mobile/>

<https://www.tuck.dartmouth.edu/people/vg/>

東京大学大学院教育学研究科
准教授 北村 友人
yuto.kitamura@gmail.com